



第十五回

桂諷會

— 祈りと鎮魂 —

翁

長山 桂三
野村 萬齋
長山 凜三

能

融

長山 桂三

思立之出
十三段之舞



独吟
狂言
舞囃子

江口
二千石
恋重苜

梅若 桜雪
野村 万作
観世鍔之丞

— 長山禮三郎 三回忌 追善能 —

●開催日時

令和4年11月23日 (水・祝)

午後1時開演 (12時開場・午後5時半頃終演予定)

●会場

国立能楽堂



長山 桂三

NAGAYAMA Keizo

能楽師 観世流シテ方 鏡仙会所属
 (公社)日本能楽会会員 (公社)能楽協会会員
 (公社)鏡仙会会員 桂謡会 主宰
 桂謡会 主宰(長山桂三 社中の会)

1976年5月13日生まれ。
 観世流シテ方長山禮三郎の次男。
 八世観世鏡之丞(人間国宝)、九世観世鏡之丞及び、
 父(長山禮三郎)に師事。
 東京を中心に全国で演能に出演。積極的に講座等も
 企画し、能楽の普及に努める。
 2008年より自身の研鑽の場として『桂謡会』を発足。
 海外公演や新作曲、復曲能にも多数出演。
 2017年世田谷長山能舞台を落成。
 桂謡会(社中の会)を主宰し、東京(世田谷、南青山)、
 神奈川県(小田原)、埼玉県(熊谷)、各地で愛好者の指
 導にあたる。
 重要無形文化財総合指定保持者。

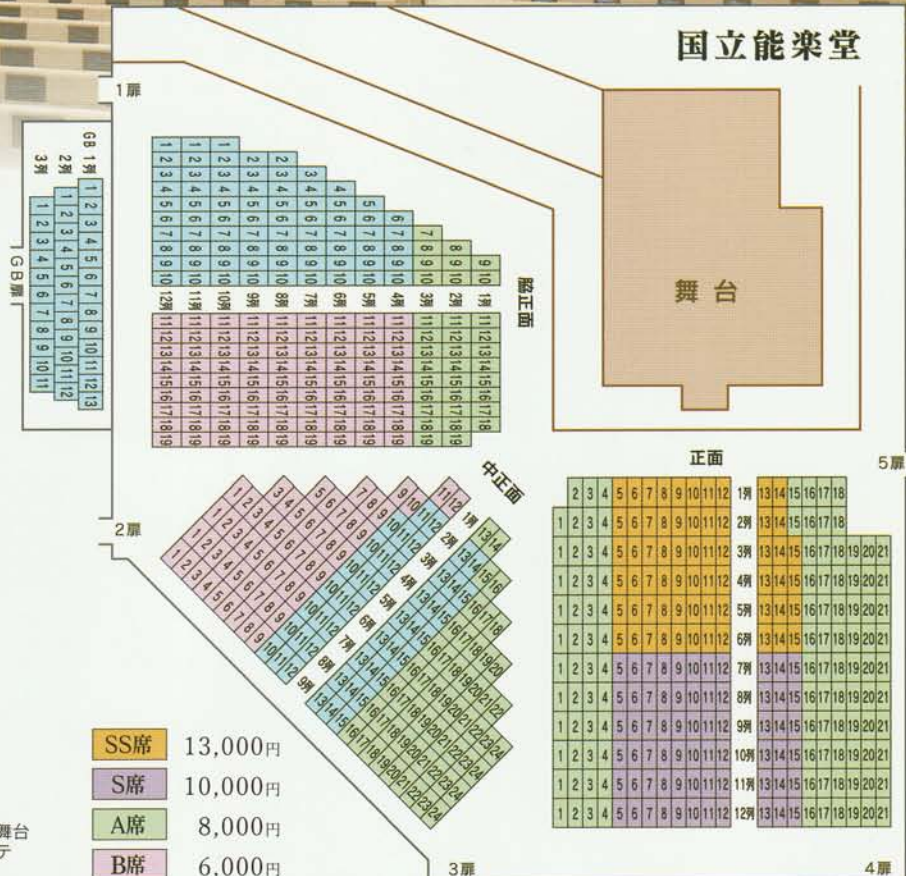


長山 凜三

NAGAYAMA Rinzo

2005年10月15日生まれ
 長山桂三の長男
 2008年独吟「老松」にて初舞台
 2013年能「合浦」にて初シテ
 2016年能「烏帽子折」子方
 幼少の時より100番以上の舞台を
 勤め、2019年子方卒業

SS席	13,000円
S席	10,000円
A席	8,000円
B席	6,000円
自由席	5,000円



● 開催日時

2022年11月23日(水・祝)

開演 13:00 (開場 12:00 / 17:30頃終演予定)

● 会場

国立能楽堂 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-18-1
 TEL.03-3423-1331 (代表)



お申込み・お問い合わせ(鏡仙会) TEL.03-3401-2285 (平日午前10時~午後5時)

桂謡会事前講座 日時 11月6日(日) 1部:午前11時 会場 世田谷長山能舞台 受講料 1000円
 上演演目をより深く、より楽しく鑑賞していただく為、見所をわかりやすく実技含めお話しいたします。

インターネットから予約される方はサイトの「チケット予約」からお申し込みください。
 KEIZO NAGAYAMA OFFICIAL WEB SITE <http://keizou.net/>

世田谷長山能舞台 <https://member.keizou.net/>

知る・学ぶ・楽しむ能楽動画

長山桂三・凜三の応援会員制サイトです。会員登録お待ちしております。

電子チケット pia.jp/t 0570-02-9999 Pコード 513-451

@nagamakeizo @nougaku @nohnoh

長山桂三の舞台活動状況、及び近況は『Twitter』『Facebook』『LINE』にアップしております。

令和四年十一月二十三日（水・祝） 十三時

第十五回 桂諷會 — 祈りと鎮魂 — 長山禮三郎 三回忌 追善能

翁 長山 桂三
三番叟 野村 萬齋
千歳 長山 凜三
面箱 野村 裕基

笛 松田 弘之
小鼓頭取 大倉源次郎
〃 脇鼓 清水 和音
〃 大倉伶士郎
大鼓 亀井 広忠

地謡 西村 高夫
柴田 稔
山崎 正道
浅見 慈一
北浪 貴裕
坂井 音雅
長山 耕三
小早川 康充

後見 観世鏡之丞
観世 淳夫
狂言後見 内藤 連
飯田 豪

〈休憩20分〉

独吟 江口 梅若 桜雪

翁

狂言 二千石

シテ 主 野村 万作
アド 太郎冠者 高野 和憲
後見 野村 裕基

舞囃子 恋重荷

シテ 山科莊司 観世鏡之丞
笛 藤田 貴寛
小鼓 大倉源次郎
大鼓 亀井 忠雄
太鼓 小寺眞佐人
地謡 梅若 桜雪
山崎 正道
馬野 正基
観世 淳夫
北浪 貴裕

〈休憩15分〉

長山禮三郎師の三回忌追善能です。能役者として大きな課題である「翁」を桂三師が披きます。「翁」は能にして能にあらざといわれるように、天下泰平、国土安穩、五穀豊穰を祈り願います。そこでは芸能を超えた万人の幸せを願う無私の精神こそが大切です。その「翁」を子息凜三さんの勤める露払いの千歳と共に成就させるのです。桂三師は一周忌の能「砦」に続いて同じく世阿弥作の大作「融」を舞います。この日、能・狂言が長く培ってきた祝言と鎮魂が深い祈りの裡に立ち現れ、集った観客の皆様と共に禮三郎師の面影を偲び、冥福を祈るのです。

笠井賢二（演出家・能楽プロデューサー）

翁

厳肅且つ清浄な空気の中、ご神体の翁面を収めた面箱を捧げ持つ面箱持を先頭に、役者一同が舞台上に登場する。「とうとうたたりたりら」という翁の謡い出しから始まり、颯爽とした千歳の舞、荘重な翁の舞、黒き翁である三番叟の力強く躍動的な採之段、鈴之段が次々と舞われる。

能の古態を留める神事の芸能で、その生命力と様式性は祝言と祈りの根源を現代に伝えている。

江口

かつて摂津国江口の里を訪れた西行法師は遊女と風流な和歌のやりとりを交わしたという。やがて遊女の霊が船に乗って現れ、月下に優雅な船遊びの様を見せると、仏法を説いて舞を舞う……。

遊女の優美さ、菩薩の崇高さが舞台に横溢する格調高い能。独吟では普賢菩薩と化した遊女が白雲に乗って西の空へと去る、能のクライマックス部分を演者一人で謡う。

二千石

無断外出した太郎冠者を叱責するため冠者のもとへと出向く主人。聞けば冠者は都見物をしてきたと言うではないか。主人が機嫌を直して都の様子を尋ねると、冠者は都で覚えてきたという謡を謡い出す。すると主人の様子は一変。それは祖先にまつわる大切な謡だと言い、みだりに謡った冠者を手打ちに

能 融 思立之出 十三段之舞

尉 長山 桂三
融大臣 森 常好
旅僧 石田 幸雄
所ノ者

笛 竹市 学
小鼓 成田 達志
大鼓 山本 哲也
太鼓 小寺眞佐人

地謡 浅井 文義
小早川 修
馬野 正基
浅見 慈一
長山 耕三
坂井 音隆
武田 文志
小早川 泰輝

後見 清水 寛二
鵜澤 久

此光陰に誘はれて

月の都に入り給ふよそほひ

あら名残惜しの面影や名残惜しの面影

〈終了予定 午後5時半頃〉

長山禮三郎

ながやま・れいざぶろう

1943年、観世流能楽師長山幸三郎の長男として東京都に生まれる。9歳の時、大阪堺の伯父勝次郎宅へ引き取られ能楽の指導を受ける。小学校卒業後、2世観世喜之に内弟子入門し24歳で独立。26歳より、8世観世鍊之亟に芸事指導を受ける。10歳にて初舞台、22歳「小鍛冶」で初シテを勤める。以降、「安宅」「屋島」「弓流」「素齋」「望月」「正尊」「当麻」「木曾」「三輪 白式神神楽」「撰待」「卒都婆小町」「鸚鵡小町」「姨捨」等を勤める。重要無形文化財総合指定保持者。大阪府知事賞、大阪文化祭賞、芦屋市民文化賞、堺市有功章等を受賞。堺市文化功労者。令和2年4月5日、永眠(享年77歳)。

写真
舞「野宮」
長山禮三郎
令和元年 桂観會

「翁」千歳 長山凜三 撮影:前島吉裕
能「融 舞返」 長山桂三 撮影:駒井壮介

恋重荷

女御に身分違いの恋心を抱く菊守の老人は、用意された荷を持ち、庭を百度千度廻るならば女御が姿を見せるだろうと聞かされる。しかし老人は重しの入った荷を遂に持ち上げることが出来ず、絶望のうちに女御を恨み、憤死してしまふ...

恋心を弄ばれた老人の妄執を強烈に描いた能。舞囃子では老人の亡霊が無念な思いを述べて女御を恨むも、やがて守護神となって女御の守護を約束するという能の最後の部分を見せる。

融

思立之出 十三段之舞

東国の僧が秋の都を訪れ、うら寂れた六条河原院の旧跡でしばし休らう。そこへ田子を担う潮汲の老人が現れ、海から離れたこの地に不似合いな潮汲姿を不審に思った僧は老人に声を掛ける。

ここはかつて栄華を極めた左大臣源融の旧邸で、陸奥の千賀の塩竈を模して造った場所なのだから海辺も同然、この潮汲姿も何ら不思議ではないと老人は言い、今は主もなく廃虚となった河原院の秋の風情に眺め入り、二人はしばし語らう。

昔融大臣が難波の御津の浜から毎日海水を汲ませ、ここで汐を焼かせて優雅に御遊なされた。しかし大臣亡きあと河原院を継ぐ者もなく、すっかり荒れ果ててしまったのだ。その物寂しさは、ここを訪れた紀貫之が歌に詠んだ程であったと老人は語って昔を偲び、辺りの名所旧跡を教える。

ふと見れば、空には中秋の名月。老人は皓々と冴え渡る月下に汐汲みの様を見せると、そのまま潮曇に紛れるように消え失せてしまふ。

深更、仮寝する僧のもとに融大臣の霊が在りし日の姿で現れると、かつてこの邸で過ごした華やかな御遊の日々を胸に懐旧の舞を舞う...

光源氏のモデルとも言われる源融。その失われた優雅な日々の情景が、月下の河原院に静かに浮かび上がる。故人の面影を偲ぶ追善公演に相応しい、世阿弥作の詩情あふれる秋の名作能。

「思立之出」は冒頭の謡の順序が入れ替わり、ワキの登場が常と異なる演出となる小書(特殊演出)。また「十三段之舞」は通常五段の早舞を十三段舞い重ねるといふ、融大臣の華やかな御遊を彷彿とさせるような演出となる重い習の小書。